

論文

アウグスティヌスの人間理解
— 『告白録』 X,1,1 ~ 5,7 を中心に—

菊 地 伸 二

はじめに

キリスト教において人間はどのような存在として捉えられているのであろうか。このことを扱う分野は、いわゆる「キリスト教人間学」と言われているが、本論においては、往昔のキリスト教思想家がこの問題をどのように捉えていたかということを通じて、このことを検討してみることにしたい。より具体的に言うならば、4世紀から5世紀にかけて北アフリカのヒッポの司教として活躍したアウグスティヌスにとって、人間はどのような存在として考えられていたのであろうか。ところで、アウグスティヌスにおける人間理解については、すでに複数のアプローチをしてきているが¹、本論では、アウグスティヌスの『告白録』第10巻に焦点を当てて、かれの人間理解について検討することにした。

それでは、『告白録』第10巻はどのような特徴を有しているのであろうか。そこで以下、下記の順に考察を進めていく。

1. 『告白録』第10巻とは
2. 『告白録』第10巻1章
3. 『告白録』第10巻2章
4. 『告白録』第10巻3章
5. 『告白録』第10巻4章
6. 『告白録』第10巻5章
7. 『告白録』第10巻における「告白する」こと
8. 人間、この語るもの—『告白録』第1巻との比較を通して

1. 『告白録』第10巻とは

『告白録』は13巻からなるアウグスティヌスの代表作であり、かれの半生を記したきわめて自伝的な色彩の濃い作品であるが、その中で、第10巻はどのような特徴を有しているのであろうか。

アウグスティヌスは、自らの誕生から幼年時代、少年時代、青年時代へと、第1巻から順に語っていくのであるが、第1巻から第9巻までと、第10巻との一番大きな違いは、前者は、アウグスティヌスの過去の時期を扱っているのに対して、後者は、アウグスティヌスの現在を扱っているという点にある。

ひとりの人間において、自らの過去を告白することと、自らの現在を告白することとのあいだには大きな相違があることは容易に想像できることであるが、それはアウグスティヌスにも当てはまることなのではないだろうか。しかも『告白録』を公にしようとしたとき、アウグスティヌスは司教職という教会の世界においてはもっとも責任ある立場にあったことを考えると、このことは、一

層当てはまるのではないかと考えられる。

ところで、『告白録』第10巻は、アウグスティヌスの現在の告白を扱っているが、単にそれだけではなく、そのような現在の告白の中で、かれのいわゆる「記憶論」が展開される箇所としても有名である。

ただ本論では、アウグスティヌスにおける現在の告白に、とりわけ焦点を当てようとしているため、「記憶論」そのものについては立ち入ることはせずに、主として、第10巻1章から5章までの叙述を中心に検討することにした²。

それでは、『告白録』第10巻は、現在の告白についてどのように叙述されているのであろうか。以下、一章ごとに、テキストを読みながら明らかにしていきたい。

2. 『告白録』第10巻1章

最初に、第10巻1章全体を引用することにしよう。

わたしを知っているお方よ、あなたを知ることができるように。わたしが知られているように、わたしが知ることができるように。わたしの魂の力よ、魂のうちに入り、けがれもしわもなく、あなたが保てるものとなるように、あなたに相応しいものとしてください。このことこそわたしの望みであり、だからこそわたしは語るのです。健やかに喜ぶときには、その望みのうちにわたしは喜ぶのです。しかしながら、この世の他のものどもは、嘆けば嘆くだけ、嘆くに値しないものとなり、嘆かなければ嘆かないだけ、多く嘆かなければならないものです。まことにあなたは真実を愛されました。真実を行う者は光のうちにきます。わたしは、あなたの前ではわたしの心の中でこの告白によって、多くの証人の前ではこの文書によって、真実を行うことを望んでいます³。

1章では、とくに、下線をほどこした二つの箇所に注目したい。

一つは、一つ目の下線の部分である「このことこそわたしの望みであり、だからこそわたしは語るのです」という箇所である。ここには端的に、語ることの意味が記されている。多少文脈を整理して述べるならば、わたしが神に知られているように、わたしが神を知ること、また、神がわたしのうちに入ることによって、わたしが神にとって相応しいものとなること、このような望みをもつために、語るということになるであろうか。さしあたり、語るということが望みと関係づけられていることに注目しておこう。

もう一つは、二つ目の下線の部分である「わたしは、あなたの前ではわたしの心の中でこの告白によって、多くの証人の前ではこの文書によって、真実を行うことを望んでいます」という箇所である。

ここには、告白の二つの意味が示されている。すなわち、「心の中での告白」と、わたしたちが今日手にとって読むことのできる「文書としての告白」である。しかもこの二つは明確に区別されながらも、真実を行うということにおいては共通のこととして見なされている。

『告白録』第10巻は、アウグスティヌスの現在の告白が述べられているところであるが、その最初の章において、改めて、語ること、告白することの意味が問われているということを確認してお

きたい。

3. 『告白録』第10巻2章

それでは、第10巻2章ではどのようなことが述べられているのであろうか。

端的に言うならば、ここでは、何のために神に告白をするのか、ということが述べられていると言ってよいであろう。

じっさい、2章の冒頭では、「たしかに主よ、御目の前においては、人間の意識の深淵もあらわになっています。たとえあなたに告白することを望まなくても、何かかくれたものがわたしのうちにあるのでしょうか⁴」と記されている。人間は神に対して何も隠すことはできないのであって、神はすべてのことを知っている。告白しようと望まないときでも、その事情に変わりはないのである。もしそうであるならば、ことさらに告白することにはどのような意味があるのであろうか。わたしたちは、何のために神に告白するのであろうか。

それに対しては次のように言われている。「しかるに、わたしのためいきが、わたしが自分に対して不愉快であることの証拠である以上は、あなたこそがわたしにとって輝きであり、満足であり、愛され、慕われるのであり、わたしはわたしを恥じ、わたしを投げ出し、あなたを選び、あなたによってのみ、あなたにも自らにも満足のゆくものになります⁵」と。

何のために神に告白するのか、ということについては、そのことが神に知られているかいらないか、というその対象である神の側からではなく、神に告白する主体である人間の側から、答えられているところに重点が置かれている。

じっさい、神に告白するとき、「肉のことはや音声によってするのではなく、魂のことはと思いのさけびによって⁶」するのであり、それを「あなたの耳は聴くのであり⁷」、わたしの告白は、「あなたのまなざしの前であなたにむかい、沈黙のうちに行為しながら、沈黙のうちに行為しているではありません。たしかにそれは、音をたてないという意味では、沈黙のうちに行為しますが、心のなかではさけび声をあげている⁸」のである。

このように2章では、何のために神に告白するのか、ということについて考察が行われており、それは、1章において登場した「心の中での告白」をさらに説明することにもなっている。

4. 『告白録』第10巻3章

それでは、第10巻3章では、どのようなことが述べられているのであろうか。

大きく言うと、ここでは、二つのことが述べられていると思われる。一つは、1章(→2節)において登場した告白のうちのもう片方の「文書としての告白」を行うことの意味であり、もう一つは、過去のことがらだけでなく、今のことがらについても告白することの意味である。

前者の、「文書としての告白」を行うことの意味に関してであるが、これについては、3章の冒頭において、「それでは、わたしと人びとのかかわりはどのようなもののでしょうか。わたしの告白を聞いて、わたしのすべての病をかれらが癒しうるとでも言うのでしょうか⁹」と記されていて、この章では、いわゆる『告白録』を読もうとする人が念頭に置かれていることが窺い知れる。そしてその中で、『告白録』を読もうとする人については、アウグスティヌスは次のように記している。「しかしながら愛はすべてのものを信じます。愛によって互いに結びつき、ひとつになっている人

びとの間では、とりわけそうです。わたしもまた、主よ、人びとが聞けるように、あなたに告白しています。わたしが真実のことを告白しているかどうかは、かれらに証明することはできませんが、愛がかれらの耳をわたしに対して開いてくれるならば、かれらはわたしの言うことを信ずるでしょう¹⁰」と。

ここには、そもそも『告白録』が、作品という形で執筆された動機とでも言うべきことが述べられていると言ってもよいであろう。

後者の、過去のことがらだけでなく、今のことがらについても告白することの意味に関してはどうか。過去のことがらについては、かれは、次のように述べている。「わたしのこの告白録が読まれたり、聞かれたりするとき、人びとは心を奮い立たせます。そして、絶望のうちにまどろむことも、「わたしには無理だ」と言うこともなく、あなたのあわれみに対する愛とあなたの恵みの甘味さのなかで、目を覚まし、自らの弱さを自覚したすべての弱い人は、この恵みによって、強くなるのです。また、善良な人びとは、すでに悪から離れている人びとの過去の悪事を聞くことを喜びますが、かれらを喜ばすのは、それが悪事であるからではなく、その悪事が過去のものであり、現在のものでないからです¹¹」と。

それでは、過去のことがらではなく、今のことがらについて告白することについては、どのように述べられているのであろうか。「わたしは知りたい。どのような益のために、わたしはあなたの面前で、この文書により、わたしがかつてどのような者であったかだけでなく、わたしが今どのような者であるかを、人びとに告白しているのでしょうか¹²」、これが、アウグスティヌス自身が記している問いかけの文章である。それでは、この問いかけに対して、かれはどのように答えているのだろうか。このことについては、3章においては、まだ十分には答えられていないように思われる。ただ、3章の最後のところでは、アウグスティヌスの文書による告白を目にしたたり、耳にしたたりする人びとについて、「じっさい、愛によって善良なかれらに対して、愛が、わたしが告白することについてわたしは嘘をついていないと、語りかけるのです。こうしてかれらのうちにある愛そのものによってわたしを信ずるのです¹³」と述べている。

この章はこの文章で終わるが、次章においても、今のことがらについて告白することの益について述べられているので、続いて検討することにしよう。

5. 『告白録』第10巻4章

第10巻4章は、次のような文章で始まる。

かれらはどのような益のためにそのこと（わたしが告白すること）を望むのでしょうか。かれらは、どれほどわたしがあなたの賜物によってあなたに近づいているかを聞くと、わたしと共に喜ぶことを望み、また、どれほどわたしがわたしの重みによってあなたにむかうのが遅れているかを聞くと、わたしのために祈ろうとするのでしょうか。わたしはそのような人びとに自分を明らかにしましょう¹⁴。

ここに記されているかれらとは、明らかに、4節の最後の箇所記されているかれらと一致している。そしてそのかれらの益について、続けて述べる。

たしかに、主よ、わたしの神よ、その益はけっして小さくありません。わたしたちのために多くの人によってあなたに感謝が捧げられるならば。また、わたしたちのために多くの人が祈ってくれるようになるならば¹⁵。

さらに、このかれらに対しては、次のように語りかける。

きょうだいのような心で愛すべきだと、あなたが教えたものをわたしにおいて愛し、嘆くべきだと、あなたが教えたものをわたしにおいて嘆いてほしい。そのようなことを、他人のような心ではなく、きょうだいのような心でしてほしい¹⁶。

かれらに求められるのは、他人のような心ではなく、きょうだいのような心であることがここで述べられる。そしてきょうだいのような心については、さらに次のように説明が加えられる。

この世的な人の子の心ではなく、きょうだいのような心でしてほしい。つまりそれは、わたしに同意するときに、わたしについて喜び、わたしに反対するときに、わたしのために悲しむような心。いずれにせよ、わたしに同意するにせよ、反対するにせよ、わたしを愛してほしい。……わたしのうちに善を見るときは喜びの息を吐き、悪を見るときは悲しみのため息をついてほしい。……そして賛歌と哀歌とのあなたの香炉であるきょうだいの心からあなたのみ前に立ち昇って行くでしょう¹⁷。

ここでは、きょうだいのような心について、具体的に説明がなされている。それは、わたしに同意するときに、わたしについて喜ぶこと、また、わたしに反対するときに、わたしのために悲しむことと言われる。同意するときも、反対するときも、そこに愛が働いているということが重要なのである。これこそが、アウグスティヌスが理解しているところの、きょうだいのような心というものなのである。

さて、これらのことが述べられた後に、アウグスティヌスは、今のことがらについて告白を行うことの意味・益について次のように述べるのである。

これこそは、この告白、すなわち、わたしが過去においてどのようであったかではなく、わたしが現在どのようであるかについての告白がもたらす益です。この告白をわたしは、あなたのみ前で、畏れを伴うひそかな喜びによるのではなく、また、希望を伴うひそかな悲しみによるのでもなく、むしろ、次のような人びとの耳に告白しようとしています。人びとのなかで信じている人びとの子たち、わたしと喜びを共有する集団の人びと、わたしと死の定めを共有する仲間たち、わたしと同じ国の人びと、わたしと旅を共にしている人びと、わたしの人生の前に生きた人びと、わたしの人生の後に生きる人びと、わたしの人生の仲間たち、そのような人びとの耳に¹⁸。

ここで注目しておきたいのは、基本的には、きょうだいのような心をもった人びとについて述べ

られているのであるが、それが、人びとのなかで信じている人びと、わたしと喜びを共有する集団の人びと、わたしと死の定めを共有する人びと、わたしと同じ国の人びと、わたしと旅を共にしている人びとなど、さまざまな豊富な表現を用いて言い換えられていることである。ただ、それらに共通して言えることは、すべて、わたしと共にある人びとであるということである。そしてさらに注目しておきたいのは、ここでのきょうだいのような心をもった人びととは、単にアウグスティヌスと同時代的な人びとだけに限定されるものではなく、アウグスティヌスより前に生きた人びとも、かれより後に生きる人びとも、そこに含まれているということである。

こうして4章の最後のところでは、アウグスティヌスは、次のように語るのである。

それゆえ、わたしは、あなたがわたしに仕えるように命じられて人びとに向かい、わたしは何者であったか、ではなく、わたしはすでに何者であるかを、また、わたしは今なお何者であるかを、明らかにしましょう。わたしは自分自身を裁くことはしません。ではこのようなつもりで、わたしの告白を聞いてほしい¹⁹。

このように4章では、過去においてどのようなであったか、ということではなく、現在どのようなであるか、ということについて告白することの益について述べられているのである。

6. 『告白録』第10巻5章

それでは、第10巻5章では、どのようなことが述べられているのであろうか。

4章の最後のところでは、「しかしわたしは、自分自身を裁きません²⁰」と書かれており、5章の最初のところでは、「まことに、主よ、わたしを裁くのはあなたです²¹」と書かれている。

なぜ、人間は自らを裁くことができないのであろうか。そして神はわたしたち人間を裁くことができるのであろうか。端的に言うならば、アウグスティヌスは、裁きという行為の前提に認識を置いていると考えられる。つまり、十分に相手を知っているからこそ、裁くことができるのである。そのような視点からすると、人間は自分自身のことを完全に知ることはできないのであり、自分のことすら裁くことはできないのである。そして、人間のことを完全な仕方知っているのはただ神のみであるということになり（じっさい、「しかし主よ、あなたは造られた人間のうちにあるすべてのものを知っておられる²²」と述べている）、神のみが人間を裁くことができるのである。

このような中で、アウグスティヌスは、現在のことを告白する際に、「ですからわたしは、自分について何を知っているかを告白するとともに、自分について何を知らないかをも告白しようと思います²³」と述べている。そしてその理由として「じっさい、わたしが自分について知ることも、あなたの照らしによって知るのであり、自分について知らないことも、知られないのは、御顔の前で、わたしの闇が真昼のようにあかるくなる日がまだ来ないからです²³」と記されているのである。

7. 『告白録』第10巻における「告白する」こと

さて、これまで2節から6節において、『告白録』第10巻1章から5章における「告白する」ことについて述べてきたが、ここでこれまでの流れを整理しておきたい。

まず、それらに先立つ1節においては、『告白録』第1巻から第9巻までと第10巻との一番大き

な違いについて、前者は、アウグスティヌスの過去の時期を扱っているのに対して、後者は、アウグスティヌスの現在を扱っているという点であることが確認される。そしてアウグスティヌスが、今の自分自身について告白していることに何よりの特徴があることが示される。

2節(『告白録』第10巻1章)においては、「告白する」ことの二つの意味が示される。すなわち、「心の中での告白」と、わたしたちが今日手にとって読むことのできる「文書としての告白」である。しかもこの二つは明確に区別されながらも、真実を行うということにおいては共通のこととして見なされていることも確認される。この節で確認されたことは、『告白録』第10巻に固有なことではなく、『告白録』全体に当てはまることでもある。

3節(『告白録』第10巻2章)においては、「心の中での告白」の意味、すなわち、何のために神に告白をするのか、ということが問題とされ、それに対しては、神がそれを知っているかどうかにかかわらず、人間にとって神に告白することが欠かすことができないことであると、人間の側からの問題として答えられている。

4節(『告白録』第10巻3章)においては、「文書としての告白」の意味と、過去のことがらだけでなく、今のことがらについても告白することの意味が問われている。

5節(『告白録』第10巻4章)においては、引き続き、過去のことがらだけでなく、今のことがらについても告白することの意味が問われている。

この二つの節を通して、アウグスティヌスが告白することについては、それが過去のことがらであれ、現在のことがらであれ、それを聞く者にとっては、それが本当のことであるかどうかは知りえないことではあるものの、それにもかかわらず、それを愛をもって信じようとするならば、そこには大きな意味・益があることが述べられている。

6節(『告白録』第10巻5章)においては、人間は自分のことについてすべてを知っているわけではないので、自分について何を知っているかを告白するだけでなく、自分について何を知らないかも告白することが必要になることが述べられている。

以上、『告白録』第10巻における「告白する」ことについて見てきたので、最後に、「告白する」こと、語ることが、人間において有している意味について、とくに、『告白録』第1巻との比較を通して検討してみることにはしたい。

8. 人間、この語るもの—『告白録』第1巻との比較を通して

そこで、すでに公にされた論文において、『告白録』第1巻から見えてくる人間の在り方について記した箇所があるので、それを引用しよう。

人間にとって語る行為、それは、他者との関係において成立する行為であると言ってもよいであろう。人間は、単に、神との関係において、〈へだたり〉があるだけではなく、他者(他の人間)との関係においても、〈へだたり〉があるのであり、そのような〈へだたり〉を、〈へだたり〉のあるがままにしておくのではなく、そのような〈へだたり〉をなくしていく方向へと働きかけるのが人間であり、しかも、そのように働きかけながらも、けっしてその〈へだたり〉がなくなることがないのも人間なのである。そして、そのような〈へだたり〉をなくすために働きかける行為のもっとも典型的なものが、語るという行為ということになるのではない

だろうか。

『告白録』第1巻1章の「あなたはわたしたちをあなたに向けて造られました。ですから、わたしたちの心はあなたのうちに憩うまでは安らぐことがないのです」という言葉を引用したが、まさしく、この世における人間の在り方は、人間における語るという行為のうちにこそ、明確に現れているのではないだろうか²⁴。

この記述によれば、『告白録』第1巻においては、語るという行為のうちに、人間の在り方が典型的に示されていることが述べられているが、ここで言われていることは、『告白録』第10巻においても当てはまるのであろうか。また、『告白録』第1巻と比較するとき、『告白録』第10巻において、とくに強調されている点としてはどのようなことがあげられるであろうか。

上記の引用の中で、『告白録』第1巻について、「人間は、単に、神との関係において、〈へだたり〉があるだけではなく、他者（他の人間）との関係においても、〈へだたり〉があるのであり、そのような〈へだたり〉を、〈へだたり〉のあるがままにしておくのではなく、そのような〈へだたり〉をなくしていく方向へと働きかけるのが人間であり、……そのような〈へだたり〉をなくするために働きかける行為のもっとも典型的なものが、語るという行為ということになるのではないだろうか」と言われているが、このことは、そのまま『告白録』第10巻において述べられていることにも該当すると言ってよいであろう。

人間と神との〈へだたり〉、人間と他の人間との〈へだたり〉というものがあり、それをなくしていく方向へと働きかけること、そしてその際に、語るという行為が重要な役割を果たしていることは両者に共通していることであると考えられる。

それでは、『告白録』第10巻において、とくに強調されている点としてはどのようなことがあげられるであろうか。これについては五つの点をとりあげてみたい。

まず一つ目にあげられるのは、語るということが二義的に用いられているということである。一つは、言葉によって語るということであり、もう一つは沈黙において語るということである。これは、それぞれ「文書としての告白」と「心の中での告白」に対応しており、とくに、後者の「心の中での告白」については、「あなたのまなざしの前であなたにむかい、沈黙のうちに行為しながら、沈黙のうちに行為しているのではありません。たしかにそれは、音をたてないという意味では、沈黙のうちに行為しますが、心のなかではさげび声をあげている」と言われている。

「心の中での告白」について、言葉という表現ではなく、さげび声という表現が使われていることから察することができるように、語るということは、そのうちに、相手に語らずにはいられない何かを含んでいるとも言えるであろう。

二つ目にあげられるのは、語るということが、喜びにつながっているということである。語ることについて、その理由を問われるならば、わたしが神に知られているように、わたしが神を知ること、また、神がわたしのうちに入ることによって、わたしが神にとって相応しいものとなること、このような望みをもつためなのであり、その語るということが実現するときには、「健やかに喜ぶときには、その望みのうちにわたしは喜ぶ」と言われているとおりである。

語るということが、喜びにつながるというのは、一つ目にあげられた「心のなかではさげび声をあげている」という表現とは相容れない印象を与えるかもしれないが、語るということが、自らの

うちにとどまる行為ではなく、言葉を発する相手に対して、何としてでも伝えたいと強く願っているという点では共通していると考えられる。

三つ目にあげられるのは、語るという行為のうちには、希望や信仰や愛が含まれるということである。じっさい、2節(『告白録』第10巻1章)では、人間が神に告白することも、人間が人間に告白することも、真実を行うことと関連づけられて述べられており、その点では、両者は共通することである。ところで、真実を行うということは、おのずとそのうちに、じっさいに真実を行うことを希望することが含まれるものである。また、とくに、人間が人間に告白するとき、それを聞く者のうちには、告白する者が真実を行っていると思わず、あるいは、真実を行っていると思愛をもって受けとめることも含まれるのである。

四つ目にあげられるのは、語るということは、その語る主体がすべてを知っているわけではないということをつねに含んでおり、そのことから、語るということが、自らに対しても、相手に対しても裁きになっていない、あるいは、裁きになるべきではないということが帰結する。

五つ目にあげられるのは、とくに、「文書としての告白」において当てはまることであるが、語るということは、その当事者が時間を共有している人びとに対して行われることであるが、単にそれにとどまるものではなく、時間を超えても成立しようということである。

*

以上、『告白録』第10巻において、とくに、強調されている点について、五つの点を取りあげて述べてきた。

語ることは、自らのうちにとどまることは反対の行為であり、語る相手に対して伝えたいという思い、あるいは伝えたいというあえぎ・渴望のようなものがそこには含まれている。ただそれは、相手に対して強引に聞かせたいというようなことではなく、自らのありのままの姿を相手に対して伝えることへの渴望であり、その実現には喜びが伴うものである。

また、自らが語ることがらについては、それが喜ぶべきこともあれば悲しむべきこともあり、それを相手に伝える際には、その内容について相手に判断を委ねることが必要であり、そこには、希望、信仰、愛が生まれる可能性を有している。

また、自らが語ることがらについては、自らが知っていることもあれば、自らがよく知りえないこともあり、総じて、自らのことは十全には知りえないことであるので、語ることに、ひとは、裁きの視点ではなく、つつましさの視点を持つことがきわめて重要になってくる。

さらに、語ることに、ひとは同時代の人びとに伝えることはもちろんであるが、時代を共有していない異なる世代の人びとに対しても伝わりうる、開かれた部分を有していると言えるであろう。

以上のことから、『告白録』第10巻においては、語ることがその内に含んでいる語ることへの渴望・あえぎ、語るときに生まれうる喜び、語るときに生まれることが期待される希望・信仰・愛、語るときに保持しておくべきつつましさ、語ることが有している時空を超えた広がり可能性などが述べられている。これらはあくまでも語ることをめぐって記述されていることではあるが、これらのことは、他者と関わりながら生きる人間の在るべき在り方を浮き彫りにしていると言ってもよいであろう。

註

1. 「アウグスティヌスの「人間」理解について—『キリスト教の教え』序章を中心に—」（『名古屋柳城短期大学研究紀要』第40号、2018年、pp.13-24）、「アウグスティヌスの人間理解—『告白録』I,1.1～5.6を中心に—」（『名古屋柳城女子大学研究紀要』第2号、2022年、pp.1-13）
2. James J. O' Donnell, *Augustine: Confessions*, Vol.III, Clarendon Press, 1992, p.150 を参照。
3. *Conf.*, X, 1, 1. Cognoscam te, cognitor meus, cognoscam, sicut et cognitus sum. virtus animae meae, intra in eam et coapta tibi, ut habeas et possideas sine macula et ruga. haec est mea spes, ideo loquor et in ea spe gaudeo, quando sanum gaudeo. cetera vero vitae huius tanto minus flenda, quanto magis fletur, et tanto magis flenda, quanto minus fletur in eis. ecce enim veritatem dilexisti, quoniam qui facit eam, venit ad lucem. volo eam facere in corde meo coram te in confessione, in stilo autem meo coram multis testibus.
4. *Ibid.*, X, 2, 2. Et tibi quidem, domine, cuius oculis nuda est abyssus humanae conscientiae, quid occultum esset in me, etiamsi nollem confiteri tibi?
5. *Ibid.*, X, 2, 2. nunc autem quod gemitus meus testis est displicere me mihi, tu refulges et places et amaris et desideraris, ut erubescam de me et abiciam me atque eligam te et nec tibi nec mihi placeam nisi de te.
6. *Ibid.*, X, 2, 2. neque id ago verbis carnis et vocibus, sed verbis animae et clamore cogitationis
7. *Ibid.*, X, 2, 2. quem novit auris tua
8. *Ibid.*, X, 2, 2. in conspectu tuo tibi tacite fit et non tacite. tacet enim strepitu, clamat affectu.
9. *Ibid.*, X, 3, 3. Quid mihi ergo est cum hominibus, ut audiant confessiones meas, quasi ipsi sanaturi sint omnes languores meos?
10. *Ibid.*, X, 3, 3. sed quia caritas omnia credit, inter eos utique, quos conexos sibimet unum facit, ergo quoque, domine, etiam sic tibi confiteor, ut audiant homines, quibus demonstrare non possum, an vera confitear; sed credunt mihi, quorum mihi aures caritas aperit.
11. *Ibid.*, X, 3, 4. cum leguntur et audiuntur, excitant cor, ne dormiat in desperatione et dicat: <non possum>, sed evigilet in amore misericordiae tuae et dulcedine gratiae tuae, qua potens est omnis infirmus, qui sibi per ipsam fit conscius infirmitatis suae. et delectat bonos audire praeterita mala eorum, qui iam carent eis, nec ideo delectat, quia mala sunt, sed quia fuerunt et non sunt.
12. *Ibid.*, X, 3, 4. quo fructu, queso, etiam hominibus coram te confiteor per has litteras adhuc, quis ego sim, non quis fuerim?
13. *Ibid.*, X, 3, 4. dicit enim eis caritas, qua boni sunt, non mentiri me de me confitentem, et ipsa in eis credit mihi.
14. *Ibid.*, X, 4, 5. Sed quo fructu id volunt? an congratular mihi cupiunt, cum audierint, quantum ad te accedam munere tuo, et orare pro me, cum audierint, quantum retarder pondere meo? Indicabo me talibus.
15. *Ibid.*, X, 4, 5. non enim parvus est fructus, domine deus meus, ut a multis tibi gratiae agantur de nobis et a multis rogeris pro nobis.

16. *Ibid.*,X,4,5. amet in me fraternus animus quod amandum doces, et doleat in me quod dolendum doces.animus ille hoc faciat fraternus, non extraneus.
17. *Ibid.*,X,4,5. non filiorum alienorum,...sed fraternus ille,qui cum approbat me,gaudet de me,cum autem inprobat me,contristatur pro me,quia sive approbet sive inprobet me, diligit me...respirent in bonis meis,suspirent in malis meis....et hymnus et fletus ascendant in conspectum tuum de fraternis cordibus, turibulis tuis.
18. *Ibid.*,X,4,6. Hic est fructus confessionum mearum,non qualis fuerim,sed qualis sim,ut hoc confitear non tantum coram te secreta exultatione cum tremore et secreto maerore cum spe, sed etiam in auribus credentium filiorum hominum, sociorum gaudii mei et consortium mortalitatis meae,civium meorum et mecum peregrinorum,praecedentium et consequentium et comitum vitae meae.
19. *Ibid.*,X,4,6. ergo talibus,qualibus jubes ut serviam,non quis fuerim,sed quis jam sim et quis adhuc sim;sed neque me ipsum dijudico.sic itaque audiar.
20. *Ibid.*,X,4,6. sed neque me ipsum dijudico.
21. *Ibid.*,X,5,7. Tu enim,domine,dijudicas me
22. *Ibid.*,X,5,7. tu autem,domine,scis eius omnia
23. *Ibid.*,X,5,7. confitear ergo quid de me sciam,confitear et quid de me nesciam,quoniam et quod de me scio,te mihi lucente scio,et quod de me nescio,tamdiu nescio, donec fiant tenebrae meae sicut meridies in vultu tuo.
24. 「アウグスティヌスの人間理解—『告白録』I,1,1～5,6を中心に—」(『名古屋柳城女子大学研究紀要』第2号、2022年)、p.11。ただし、下線の箇所については、全体の文意をより明確にするため、著者の判断により文言を変更した。

[テキスト・翻訳]

テキストとしては、羅仏対訳版である *OEvres de Saint Augustin 13 & 14, Les Confessions* (Declée de Brouwer,1962) を用いた。翻訳については、基本的には拙訳を用いているが、下記のものから断りなく引用した箇所もある。

アウグスティヌス『告白Ⅰ～Ⅲ』(山田晶訳、中央公論新社、2014年)

アウグスティヌス『告白録 上』(アウグスティヌス著作集5/Ⅰ、宮谷宣史訳、教文館、1993年)

アウグスティヌス『告白録 下』(アウグスティヌス著作集5/Ⅱ、宮谷宣史訳、教文館、2007年)

[参考文献]

James J.O' Donnell, *Augustine: Confessions, Vol. III*, Clarendon Press, 1992

荒井洋一『アウグスティヌスの探求構造』(創文社、1997年)

岡野昌雄『アウグスティヌスの『告白』の哲学』(創文社、1997年)

加藤信朗『アウグスティヌス『告白録』講義』(知泉書館、2006年)

加藤武『アウグスティヌスの言語論』(創文社、1991年)

山田晶『アウグスティヌスの根本問題』(創文社、1977年)

Augustine on Anthropology in the *Confessions*, X, 1, 1-5, 7

Kikuchi, Shinji*

この論文では、アウグスティヌスの人間理解について、『告白録』第10巻の1章から5章までを中心に考察する。アウグスティヌスは、1章から5章において、神に告白することの意味を問題にしながら、神に告白するだけでなく、文書の形で告白することの意義、過去のことだけでなく現在のことを告白することの意義を論じていく。

『告白録』第10巻においては、語ることがその内に含んでいる語ることへの渴望・あえぎ、語るときに生まれうる喜び、語るときに生まれることが期待される希望・信仰・愛、語るときに保持しておくべきつつましき、語ることが有している時空を超えた広がりの可能性などが述べられており、これらの語ることをめぐる記述は、他者と関わりながら生きる人間の在るべき在り方を浮き彫りにしていると言える。

キーワード：人間理解, 告白する, 語る, 希望・信仰・愛

*President, Nagoya Ryujo Women's University